

大同生命厚生事業団の役割

公益財団法人 大同生命厚生事業団の、設立時からこれまでの取り組みと将来へ向けて果たすべき役割について、工藤稔理事長にお聞きしました。

■ 助成は「時代」を理解することから始まる

——全国に数ある助成財団の中で、公益財団法人 大同生命厚生事業団にはどのような特色があるとお考えですか。

工藤 やはり一番は、「今」の社会というものの理解を深め、社会への関わり方を模索し、助成を行ってきた、ということではないでしょうか。「今」にどう関わればよりよい「将来」へとつながるのか、ということを見据えながら、公益財団法人 大同生命厚生事業団では「医学研究助成」をスタートさせました。急激な高齢化が進展する中、高齢者介護にも着目して、これを「地域保健福祉研究助成」へと発展させました。また、「ボランティア活動助成」についても時代に合わせて対象を広げるなど、柔軟に対応してきました。

このような当財団の特色には、大同生命の創業者の一人である広岡浅子の考え方が源流にあるのではないかと思います。広岡浅子は2015年、連続テレビ小説「あさが来た」(NHK)の主人公のモデルとして注目されました。また、その放送開始日が関東地区助成金贈呈式の日と重なり、贈呈式会場はとても盛り上がりました。

——広岡浅子と大同生命厚生事業団の考え方の共通点を少し具体的にお聞かせいただけますか。

工藤 以前は大同生命の社史に創業者や歴代の役員の名は出てきても、広岡浅子の名前はありませんでした。しかし、いろいろ調べてみますと、広岡浅子は生命保険事業に強い関心を持ち、大同生命設立に向けて積極的な役割を果たしたことがわかりました。これは大同生命のウェブサイト「大同生命の源流 加島屋と広岡浅子」でご紹介しているとおりです。

広岡浅子が生命保険事業を重視したのは、社会救済の理想の実現という想いがあったからだと思います。当財団もまた、厚生事業団という立場から困窮する人々を実際に支えている方々や、保健・医療・福祉の分野に従事しながら地域のために研究を続けておられる方々を支援することを目的としています。社会の救済という意味で広岡浅子の考え方に近いものがあると考えています。

■ 「健康小冊子」の発行

——理事長は助成事業とともに、「健康小冊子」の発行を続けていることを重視しておられるそうですね。

工藤 はい。1975年から2023年までに、計76冊発行しました。その時々々の社会の要請というのでしょうか、人々が関心を持っている健康の保持増

進に役立つ情報や知識を、専門家の先生方が一般の方にも理解しやすいように書かれています。この50年史もそうですが、何十年後かに見返せば、当時何があったかを知ることができる、ひとつの記録になると思います。最新の健康小冊子No.76のテーマは「新型コロナウイルス感染症」でした。ここでは公的な情報をもとに、新型コロナウイルス感染症流行期の社会的背景や、実際にどういったことが起きたのか、どういうことが必要だったのかということが実にわかりやすく書かれています。新しい感染症の脅威はまたいつかやってくるでしょう。そういったときの備えとしても、役立つ資料だと思います。

健康小冊子は国民の健康の保持増進のための知識の普及啓蒙を目指し、そのテーマは生活習慣病や精神疾患、アレルギー、更年期障がいなど多岐に

わたっています。患者さんなど当事者や、またその周囲の方々に理解を深めてもらうためにも大変有意義なものであると考えています。

■ オックスフォード保健福祉研修の意義とは

——大同生命の創業100周年記念寄附事業「地域保健福祉国際交流助成(オックスフォード保健福祉研修)」についても振り返っていただきたいと思います。多田羅浩三氏(大阪大学大学院教授、大同生命厚生事業団理事)が大変ご尽力された事業でしたが、実施された意味は大きかったのではないのでしょうか。

工藤 はい、そのとおりです。当時の齋藤理事長、白木常務理事、そして当財団の理事を長年務めて



公益財団法人 大同生命厚生事業団 理事長

工藤 稔

1978年4月 大同生命保険相互会社 入社
2014年6月 公益財団法人 大同生命厚生事業団
理事長〔現任〕
2015年4月 大同生命保険株式会社
代表取締役社長
2021年4月 同社 代表取締役会長〔現任〕

おられた公衆衛生学研究の第一人者・多田羅氏によって実現した事業でした。

多田羅氏がよく話しておられたことがあります。助成金贈呈先の選考に際し「この研究や事業は本来、個人や民間がやるものではない。国や地方自治体が取り組むべきものだ」ということです。また、「現代の日本の医学は、たとえばゴッドハンドといわれるような一部のドクターが脚光を浴びている。それはとても大事なことだけでも、公衆衛生の大切さがなおざりにされているのではないか。公衆衛生は大勢の人の命や健康、暮らしを守るものであるという、その重要性の認識が薄れてしまっているのが嘆かわしい」とおっしゃるのです。特に若い世代であるほどその傾向が顕著であると危惧されていました。この意味においても、今後の公衆衛生を担う40歳未満の方々に、公衆衛生の先進国といわれるイギリスで研修を受けていただいたことは、社会的に大きな意義があったと思います。学ぶこともたくさんあったでしょう。一方で、参加者からは「日本のほうが優れているところも多い」という感想もありました。こういうことも、実際に現地を見てみないとわからなかったと思うのです。イギリスあるいはアメリカなどの公衆衛生の考え方は日本とどう違うのか、どういう問題にどう対処しているのかを知り、新しい視点を持つことは、日本の公衆衛生の発展に大いに役立つはずです。また、日本の優れているところを伸ばしていくためにはどうすべきか、その方法を考えるヒントにもなったのではないのでしょうか。

将来的な話になりますが、金利の大幅な上昇など財政的な環境が整えば、イギリスに限らずぜひ海外での研修を再開し、継続させていきたいと考えています。

■ 善意と交流の輪を広げ、よりよい未来へ

——大同生命厚生事業団では今後どのような新しい取り組みをお考えでしょうか。

工藤 近々、助成金を贈呈させていただいた方同士の交流サイトを設けたいと考えています。当財団では毎年助成先の公募を行い、審査・選考を経て、助成金を贈呈しています。受贈者は、公正で厳しい審査により採択された研究者あるいはボランティアグループであり、当財団がそうした方々を結びつける役割を果たせないだろうか、と考えたわけです。また、この審査・選考をご担当いただいている選考委員の先生方に感謝を申しあげたいと思います。公募書類の審査・選考については大変真摯に対応していただいております。本当に頭が下がります。1つの事案で意見が大きく分かれたときなどは、意見の異なる先生のお考えも十分に聞き、その意見を精査し再び検討するなど、時間をかけ、非常に公明正大に選考していただいております。

——交流サイトを発案されたきっかけは何だったのですか。

工藤 助成金贈呈式会場において、受贈者のみなさんが活発に意見交換されているのを見てきたことです。「こういう問題に対してあなたのところではどうされていますか？」「うちではこうしています」ということを熱心に話し合われています。そうした意見や情報の交換を日常的に行うことができる場があれば、それぞれの研究やボランティア活動が更なる高みに向かうのではないかと考え、交流サイトを設ける価値は高いと判断しました。さらに、研究者、ボランティアグループの輪が広がる、連携が生まれるという意味でも価値があるのではないかと考えています。

助成金を贈呈するだけでなく、交流の場を提供することで、研究やボランティア活動の活

性化に役立ちたいと心から望んでいます。

——ありがとうございました。最後に、将来に向けて、大同生命厚生事業団の果たすべき役割についてお聞かせください。

工藤 当財団は本年50周年を迎えることができました。これを一里塚とし、次の50年、100年を見定めながら歩み続ける中で、少しずつ変わる社会の要請を捉え、当財団の役割の中に的確に落とし込んでいってほしいというのが私の願いです。これがこの先も変わらず求められる、大切なことだと思います。そのためには、公衆衛生学の先生方やボランティアの専門家ともますます意見交換

を深めることが必要だと考えています。

時代という道程で遭遇する社会の要請を見落とさず、よりよい未来を構築するために存在し続けること、それが大同生命厚生事業団の使命と考えています。



大同生命本社ビル1Fの広岡浅子像